

第4 A（中）分科会 ―組織・運営に関する課題―

提案主題 目標協働達成校の取組を通じた組織の活性化における教頭の役割

司会者	国東市立国東小学校	滝口俊也
提言者	姫島村立姫島中学校	西村和彦
助言者	国東市立武蔵中学校校長	渡邊和彦
記録者	姫島村立姫島小学校	田川勝樹

1 協議の柱

- ・目標協働達成校の視点での学校組織の活性化について

2 協議の実際

(1) 質疑・応答

Q：目標協働達成チーム会議の開催にあたって、実際の教頭としての大変さは？

A：事前の案内状配布とともに、開催日の数日前の出席確認等の配慮も必要なこと。

Q：会議において、地域・家庭からの願いや要望の出にくさがあると思うのだが？

A：一方的な提案に終始しないよう、家庭でも共に取り組みましょうというスタンスで進めている。家庭でのパソコンやスマホの取組もそのスタンスだが、まだ改善の必要も感じているところ。

(2) グループ協議から

○課題の共有のためには、様々な課題をよく検討し、仕分けすることも大事。学校か、家庭か、地域なのかという視点で。

○校内のミドルリーダーの育成がやはり大事である。と同時に、分掌担当との密な伝達・指導も欠かすことはできない。

○既存の学校と地域との交流活動をどう生かし、発展させていくかということも目標協働達成のためには大切な視点であろう。

○地域・保護者は学校応援団ととらえるようにしたい。教頭として、肩の力を抜いて連絡・調整にあたるという構えでよいのでは。他方、ミドルリーダーにも課題を自らのこととして受け止めるような自覚を促していくことも大事であろう。

3 指導助言

- ・今回の提言をいただいた「国東・姫島」も「学力向上」である。全てはここからスタートしている。その中での目標協働達成校の取組である。自分自身、教頭時代無我夢中で諸会議のセットアップを行ってきた。校長になった今、目標協働達成校やコミュニケーションスクールの意味（意義）は「できること」が「できにくい状況」になったということ。つまり学校を取り巻く環境がそうになっているという現状認識の上での必要性からのものなのだととらえている。
- ・この提言は「検証・改善」からのレポートであった。「知る・つなぐ・まかせる・ほめる」などのキーワードで取組の様子がよくわかった。総じて、野球で言えば、教頭はピッチャー、そこへ指示・サインを出すのがキャッチャーの校長である。